

### Ⅲ 人権文化にあふれたまちづくりのためのコラム

#### みんなの取組① NPO法人 のってこらい(熊野市)

##### 関連する県の 人権施策

人権施策 101 人権が尊重されるまちづくり 人権施策 301 相談体制の充実

人権施策 402 子ども 人権施策 405 高齢者

##### 取組の概要

過疎・高齢化が進む集落で、交通空白地における交通不便の課題に対し、住民自らがNPO法人を設立しました。公共交通空白地有償運送の制度を活用し、地域主体の交通サービスを運用しています。

##### ① ニーズに合わせて

熊野市五郷町は一人暮らしの高齢者が多く、移動手段が少ないことが課題でした。2006年、「道路運送法等の一部を改正する法律」が施行されました。交通空白地の問題に市議会議員(当時)の増田さんらは市のサポートも受けながらバス・タクシー会社等と話し合いをするとともに、住民アンケートも実施。2010年、NPO法人「のってこらい」を設立し、自家用車による有償旅客運送を始めました。現在、利用者は月平均約180人で、買い物や通院、美容室や墓参り、小学生の通学手段等にも利用されています。料金は、タクシーの2分の1以下に設定。普段、五郷町の運転手は1人ですが、一度に多くの人が利用するときに備え、約10人が有償運送の運転講習を受けています。



##### ② 継続していくために

のってこらいは、市の車両を無償貸与してもらっていますが、ふるさと納税のガバメントクラウドファンディング制度を活用し、車体購入の費用にあてました。現在、約140人が利用登録。利用する人だけでなく、自家用車を所有している人や若年層、地域の出身者も登録しています。今は地域から離れている人も、この町で暮らす将来のために会員になっている人もいます。地域で支え、地域を元気にする存在をめざしています。



##### ③ 「一隅を照らす」の具現化を～運転手の田室さんは

設立当初から代表理事も務めた運転手が亡くなった後、地元に戻ってきた田室さんがハンドルを握っています。

田室さんは、利用者にゆっくり買い物をしてもらったり、玄関に近い場所に車を停めたり、荷物を玄関まで運んだりと温かくサポートしています。また、利用がない時は、自転車による高齢者の見守り活動をしています。

近年、人の温かさ、まちを元気にしていこうという人の思いがある五郷地区に移住する人が増えています。

のってこらいでは、田室さんの後継を作るとともに、前代表理事の「一隅を照らす」という言葉を具現化していく取組を継続していきたいと考えています。



NPO法人 のってこらい 連絡先(田室さん) 電話 090-1596-8695

### Ⅲ 人権文化にあふれたまちづくりのためのコラム

#### みんなの取組② NPO法人 INAANZA MIE(津市)

関連する県の 人権施策	人権施策 101 人権が尊重されるまちづくり 人権施策 201 人権啓発の推進 人権施策 402 子ども 人権施策 406 外国人
取組の概要	高校生二人が、ウガンダで生産されたカカオ豆を通じた国際協力をめざし、「おいしいものは幸せ」をモットーに設立したNPO法人です。三重からできる国際協力を模索した取組を進めています。

##### ① あたりまえがあたりまえでない国がある

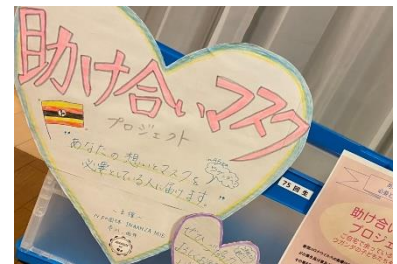
「自分たちがあたりまえに食べているチョコレートの味を、ウガンダでカカオ豆生産者の多くは知らない。」その背景は、先進国がカカオ豆を安価で買い取る事実があります。INAANZA MIEを設立した二人の高校生は、「チョコレートを生産国の人たちに食べてもらいたい」と考えました。

「ウガンダに行き、支援」との思いで、NPO法人ワールド・ビジョン・ジャパン主催の「未来ドラフト 2019」に参加し、決勝に残りました。また、2019年度「第3回三重NPOグランプリ」では、グランプリを受賞しました。表彰されたことで、校内外でこの活動やウガンダの現状を広めることになりました。



##### ② 助け合いマスクプロジェクト

「ウガンダへ」と思っていた矢先、新型コロナウイルスの感染拡大で渡航が叶いませんでした。そこへ、ウガンダで、マスク不足に陥っていること知りました。早速、「助け合いマスクプロジェクト」を開始。学校や地域に呼びかけ、1万枚を超えるマスクを神戸の支援団体を通じて送ることにつながりました。



##### ③ カカオ豆からグローバル

次に、カカオ豆からチョコレートを作るグローバルなワークショップを企画しました。グローバルとは、グローバルとローカルをつなげた言葉です。カカオ豆からチョコレートを作ることで、子どもにもチョコレートのことやウガンダのことを知ってほしいと考えました。チョコレートづくりには、地元の洋菓子店「ムッシュコウノヤ」に協力いただきました。

ワークショップは2回開催。20数人の親子が参加。参加した子どもたちはとても楽しそうで、その様子を見てみると、自分たちもうれしかったと言います。こうやって取り組むことで、取り組む目的を明確に持つと、社会の中には力を貸してくれる人がいることを実感したそうです。

取組を通して、ウガンダに直接何かをするだけではなく、三重でウガンダを知り、三重もウガンダも活性化できればと考えています。そんな思いを次の世代に伝え、グローバルで持続可能な取組を考えていきたいと思っています。

高校生2人で立ち上げた活動は、今、後輩たちが受け継いでいます。



NPO法人 INAANZA MIE 連絡先 ● 電話 059-232-2004(高田高等学校内)



### Ⅲ 人権文化にあふれたまちづくりのためのコラム

#### みんなの取組③ 青年の会 つなかい(伊勢市)

関連する県の 人権施策	人権施策 101 人権が尊重されるまちづくり 人権施策 201 人権啓発の推進 人権施策 202 人権教育の推進 人権施策 401 同和問題 人権施策 402 子ども
取組の概要	「部落問題のことを話せる場所をつくりたい」「部落問題と真剣に向き合う大人でありたい」等の思いで青年の会「つなかい」を設立しました。自分たちができることを模索しながら地域での活動を続けています。

##### ① 「一人ではない、仲間がいる」ことが、どれだけ心強いのか

20年以上前のことです。地区学習会は、多くの子どもたちや保護者、教師が楽しく話す場でした。そんな中で育った宮武さんたちは、「部落問題のことを話せる場所をつくりたい」「子どもの頃、部落問題と真剣に向き合う親の姿をみてきたからこそ、自分たちが親になるこれからは、自分たちがそうでありたい」などと思っていました。その後、宮武さんは教育集会所で指導員になります。仲間や後輩につらい思いをさせたくないと思いつつ、教育集会所で被差別体験や差別への不安を聞くにつれ、やっぱりつながり合う場所が必要と、2017年2月、青年の会「つなかい」を立ち上げました。



##### ② 「つなかい」の活動

「つなかい」では近況のほか、さまざまな人権問題等を話しています。中学生や高校生の学習会にも出席し、一緒に勉強したり話し合ったりしています。保護者からは、「勉強も大事やけど、高校が離れてしまった友だちとずっとつながっていられることが何より大事。子どもが喜んで行くとこの会をなくしてほしくない。」等の声が寄せられています。教職員に向けて話をすることもあり、部落問題から目を背けず、部落差別をなくす一人として子どもたちや保護者と関わってほしいと伝えています。



##### ② 地域とのつながり

設立当初、地域の代表の人たちに「つなかい」の活動や目的を伝えました。「青年が部落問題を語ってくれることに意味がある」「話し合ったことを聞かせてほしい」などの期待を返してもらいました。2018年には、あさまフェスタ（町民文化祭）にスタッフとして参画し、人権学習発表会で活動紹介をしました。子どもたちと関わる時には、大人になっても活動は続けられることを伝えています。20歳代、30歳代になると、生活も変化し、人権活動の継続が難しくなってきます。また、近年は、新型コロナの影響で、思うような活動ができていませんが、仲間どうしで連絡は取り合っています。宮武さんは、「先輩や大人の皆さんのがんばりを見てきたからこそ、自分たちもがんばれるんです。まずは、小学校から社会人になるまでつながりが切れないようにしていくことが大切です。つらいことがあった時、相談できる場を残し続けたいんです。差別があることをないことにしたくないんです。差別をする人がいるから差別があり、差別をなくしていくことは、一時の熱ではなく、日常に差別をなくす取組を継続していきたいと思っています。」と話しています。



### Ⅲ 人権文化にあふれたまちづくりのためのコラム

#### みんなの取組④ 松浦武四郎記念館(松阪市)

##### 関連する県の 人権施策

人権施策 101 人権が尊重されるまちづくり 人権施策 201 人権啓発の推進  
人権施策 402 人権教育の推進 人権施策 410 さまざまな人権課題

##### 取組の概要

幕末に北海道を6回調査し、北海道の名付け親といわれる松浦武四郎を顕彰する「松浦武四郎記念館」では、北海道と交流・連携しながら、武四郎の功績やアイヌの文化等について知ってもらうための取組を進めています。

##### ① 松浦武四郎記念館の設立

松浦武四郎記念館は、松浦家で代々大切に保存されてきた武四郎の資料を展示し、功績を顕彰するために、平成6年に建設されました。アイヌの人々には、明治以降の開拓の中で言葉や文化を否定され、民族の誇りが傷つけられた歴史があります。武四郎は差別が当たり前だった時代にアイヌの人々の生き方を尊重し、対等に接することで交流を深めました。異なる文化を受け入れ、多様性を尊重する生き方は、ダイバーシティの先駆者と言っても過言ではありません。



##### ② 松浦武四郎記念館を舞台に

松浦武四郎記念館では、武四郎の生没月にあたる2月の最終日曜日に「武四郎まつり」を開催しています。ここでは、アイヌ古式舞踊の披露、北海道の特産品や飲食物の販売、アイヌ文化の体験コーナー等を設けています。ここ2年間は、新型コロナウイルスの影響で中止を余儀なくされましたが、例年約6,000人が来場する大イベントです。



松浦武四郎記念館では、三重県民だけでなく、北海道の人たちにも、アイヌの人々の暮らしや民族の誇りをもった生き方、武四郎とアイヌの人々の心温まる交流などを、松浦武四郎が残した膨大な記録を通じて紹介したいと考えています。学芸員の山本さんは、「今に生きる私たちがアイヌの人々とどのように関わるべきなのかを考えてもらうきっかけになれば」と話します。

2022年4月、松浦武四郎記念館がリニューアルオープンします。リニューアル後は、武四郎のさまざまな功績や重要文化財に指定された資料を紹介するとともに、興味を持ったことを調べることができるスペースも提供します。

##### ③ アイヌの人々についての人権問題は三重にもある

県が令和元年度に実施した「人権問題に関する三重県民意識調査」の結果では、県内にもアイヌにルーツがあることで差別を感じた人がいることがわかりました。令和元年に施行された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」では、日本全体でアイヌの人々への理解に向けた取組を行うことが規定されており、取組を通して、誰もが自分のルーツに誇りをもって生きていくことができる社会にしていく必要があります。そのためにも、アイヌの人々の歴史や文化を知ることが大切です。今後も、松浦武四郎記念館では武四郎の膨大な調査記録に光を当てるとともに、北海道内の博物館や民族共生象徴空間（ウポポイ）との交流・連携を進め、今を生きる私たちにどうつなぐかを考えていきたいと思えます。





## Ⅲ 人権文化にあふれたまちづくりのためのコラム

### みんなの取組⑤ 株式会社 ミルボン（伊賀市）

<b>関連する県の 人権施策</b>	人権施策 101 人権が尊重されるまちづくり 人権施策 201 人権啓発の推進 人権施策 301 相談体制の充実 人権施策 404 障がい者
<b>取組の概要</b>	ミルボンゆめが丘工場では、施設外就労の受け入れをきっかけに障がい者が社員として働いています。障がいがある人の働きやすさを考えることは、すべての従業員の働きやすさにつながると考え、取組を進めています。

#### ① 施設外就労の始まり

ミルボンゆめが丘工場の生産本部長である村田さんは、社会福祉法人維雅幸育会から障がい者雇用の依頼を受けたとき、障がいの有無に関係なく利益を生む仕事をしてもらいたいと考え、障がい者雇用率を達成するための特例子会社ではなく、施設外就労として、就労訓練として2005年から受入を始めました。この取組は現在、「M.I.Eモデル」として評価されています。



#### ② 社員も関わっていくことから

現在、ゆめが丘工場では、約30人の障がい者が製造ラインで働いています。村田さんは、「障がいがある人がいてあたりまえなんです。障がいがあるからといって、特別に意識は変えていません。」と言います。中には、障がいにより心をうまくコントロールできないときがあります。そのようなときは支援者が関わりますが、周りの社員も障がいを理解し、関わり方を学ぶ研修も行っています。そのような経験が共生の意識を持つことにつながっています。

#### ③ 障がい者も、企業も、福祉事業所も「三方よし」の実現を

障がい者にとって、施設外就労を通して社会とつながることは、生活の質を上げることにつながります。また、健常者とともに仕事をし、スキルを身につけ、仕事に見合う工賃が支払われることで、働く意欲が高まります。ゆめが丘工場では10年以上前から離職者はいないそうです。また、直接雇用につながった人も8人います。



村田さんは、「ゆめが丘工場では、障がい者を雇うことでのデメリットや生産に関するコストはかかっていません。」と話します。障がい者に対する工場での合理的配慮は、すべての人にとって、働きやすい職場づくりにつながっています。

福祉事業所にとって施設外就労は、安定的な就労先の確保につながるとともに、支援計画に第三者の意見が取り入れられること、職員の意識の変化など、プラス面が多いそうです。

今後も、就労移行や定着支援、賃金・工賃の向上など全てに効果があり、企業の雇用率達成やCSRにも寄与する施設外就労を継続し、障がいがある人も、企業も、福祉事業所の「三方よし」を実現していきたいと考えています。

### Ⅲ 人権文化にあふれたまちづくりのためのコラム

#### みんなの取組⑥ 古河山正覚寺(津市)

関連する県の 人権施策	人権施策101 人権が尊重されるまちづくり 人権施策301 相談体制の充実
	取組の概要 新型コロナウイルスの感染拡大により、不安や悩みを抱える人が増えているといわれています。「誰かに話を聞いてもらいたい、吐き出したい」そんな人たちのために、「オンライン駆け込み寺」を開設しています。

##### ① オンライン駆け込み寺はこうして始まった

住職の正親(おおぎ)さんは、「新型コロナ」の感染拡大により、不安や悩みを相談できない人が増えたり、「自棄うつ」や自死者が増加したりしている状況を聞くにつれ、「僧侶である自分に、何かできることはないか。インターネットを利用すれば、コロナ禍でも気軽に相談してもらえるのでは。」と考え、令和2年6月に「オンライン駆け込み寺」の活動を仲間とともに始めました。現在、5人の僧侶が登録。相談料は無料で、事前にチャットで日程調整し、相談を受けています。



##### ② お寺だからこそできることがある

「オンライン駆け込み寺」は、悩みのある人だけの相談場所ではありません。話し相手が欲しい人や寺院への質問がある人にも対応しています。相談者が安心できるようにカメラをOFFにした相談も受けています。相談の際は、相談者の気持ちを受け止め、聞くことを中心にしながら、共感することを第一に答え探しをするのではなく、「気持ちを軽くするお手伝い」を心がけています。また、時には仏教の教えをもとにした考え方を伝えることもあります。



正親さんは、「相談のご連絡をすることは勇気がいったはずですが、そのような中で、まずご連絡くださることを嬉しく思います。私たちはカウンセラーではありませんし、特別な力を持っている訳でもありませんが、少しでもお力になればと思っています。本来、お寺は誰もが気軽に來ていただける場所であり、悩みや愚痴を吐き出せる場所であるべきです。」と言います。

##### ③ 地域に開かれた存在に

正覚寺では、夏季休業中に津市、地元の企業、三重大学や皇学館大学などの学生の協力を得て、宿題をしたり、遊んだり、ご飯を食べたりする小学生対象の「子ども会(お寺であそぼっ!)」を開催するなど、地域の方々の拠り所となるよう、さまざまな活動を展開しています。



「オンライン駆け込み寺」の相談は、概ね2~3か月に一度くらいです。正親さんは、「このような活動は一人ではできません。ホームページの管理をしてくださる方、同じ思いで活動してくれる僧侶など、やってみたいを実現させてくれた仲間がいます。みなさまに支えられ、見守られているからこそできることです。正覚寺をお支えくださる皆さまや地域の皆さま、またご縁のある皆さまのお力に少しでもなれるよう、お寺として、僧侶として精進していきたいと思っています。」と話しています。



### Ⅲ 人権文化にあふれたまちづくりのためのコラム

## みんなの取組⑦ NPO 法人 shining 子どもの居場所づくり事業部(鈴鹿市)

関連する県の 人権施策	人権施策101 人権が尊重されるまちづくり 人権施策301 相談体制の充実 人権施策402 子どもの人権
取組の概要	「地域で子どもを見守る」をモットーに、乳幼児から若者までを対象とする多様な居場所づくりに取り組んでいます。人のつながりの中で、子どもも親も孤立させずに、誰もが安心して暮らすことができる地域づくりをめざしています。

### ① 居場所づくりをはじめたきっかけ

2014年、NPO法人Shiningは「鈴鹿子ども食堂“りんごの家”」などの活動を始めました。2021年には、「子どもの居場所づくり事業部」(以下、事業部)を設置します。この設置は、事業部長の山浦久美子さんが不登校の子どもたちとボードゲームで遊んだ経験がきっかけです。事業部では、不登校生徒を対象とする「みんなの居場所 ラピユタすずか」で、オンラインゲームやレジン制作、学習支援等を行い、1500㎡の「アートガーデンすずか」で外遊びの好きな子ども向けの自然体験活動、多世代交流の場として「ボードゲーム倶楽部」を実施しています。



### ② 目の前にいる子どもたちを笑顔に

学校に行きづらい子、行かないと選択をした子、家庭にも地域にも居場所を見出せない子など、さまざまな子どもたちがいます。事業部の活動は、信頼関係の構築や自己肯定感の向上につながるような居場所を提供するとともに、子どもたちの強みを見つけて生かし、伸ばそうとしています。活動を続けていくと、「ラピユタすずか」に関心を持ちながらも行くことができない不登校の子どもたちに出会います。そこで、ラピユタの子どもやスタッフがその子の自宅を訪問し、一緒にゲームをしたりしていると、その子がラピユタに様子を見に行くことができるようになったそうです。山浦さんは、「家から出られなかった子が、みんなと楽しそうにおしゃべりしたり、遊んだりしている様子を見られるだけでも幸せなのですが、同時にラピユタの子どもたちがその子の気持ちを第一に考えて接していることを誇らしく思っています」と話します。



### ③ 「誰一人取り残さない」街を実現したい

また、山浦さんは、「居場所づくりの活動をしていると、大変厳しい状況に置かれている子どもと出会うことがあります。そんな子どもが気兼ねなくラピユタなどを利用できるような支援がぜひとも必要です」と言います。社会格差の拡大や不登校の増加等、子どもを取り巻く問題は、多様化する家族のあり方に対応しきれていない福祉システムや、地域の人間関係の希薄化等の社会構造の問題につながっています。「子どもは生まれる場所を選ぶことができません。すべての子どもがこの地で安心して暮らすことができるよう、困難な子どもたちに寄り添い、行政には粘り強く働きかけるとともに、子どもも大人もそれぞれの強みを生かして支え合うことができる共生社会の実現をめざして、信頼し合える仲間の輪を広げていきたいと考えています」。事業部では、活動を継続していくための支援者を募集しています。







令和4（2022）年版  
第四次人権が尊重される三重をつくる行動プラン年次報告書

令和4（2022）年 11月発行

三重県環境生活部人権課  
〒514-8570 三重県津市広明町13番地  
T E L 059-224-2278 F A X 059-224-3069  
E-mail jinken@pref.mie.lg.jp